

疑問文データベース作成に関する中間報告
——中世日本語資料を中心に——

竹村 明日香（大阪大学特任研究員）

1. はじめに

日本語疑問文のデータベースを構築する一環として、本年度は、中世日本語資料を中心に疑問文の用例採集を行った。

日本の中世期（鎌倉～室町期）は、前半（13～14世紀前半）が係り結びの衰退期、後半（14世紀後半～16世紀）が間接疑問文の形成期に相当しており（金水 2013 参照）、疑問文の通時的研究をする上で重要な時期に当たる。また当該期は口語資料・文語資料ともに比較的恵まれた時期でもあるため、話しことばと書きことばの双方における疑問文を比較・対照することも可能である。

本年度は、こうした中世期の特色を生かせるよう、口語・文語の両方の資料から用例採集を行ってデータ化した。以下ではそれらの概要と進捗状況の報告を行う。

2. 調査資料

本年度は中世日本語資料として、キリシタン資料と抄物から用例採集を行った。

キリシタン資料の中では、『天草版平家物語』と『天草版伊曾保物語』が早くから電子化されており¹、用例検索も簡便になっている。したがって本年度はまだ電子化が進んでいない文語資料を中心に用例を収集した。ただし『天草版平家物語』は口語資料として利用価値が高いため、文語資料に優先して調査を行った。調査対象資料は以下の通りである²。

〈キリシタン資料〉

- (1) 『サントスの御作業』（1591年、オックスフォード大学ボードレイ文庫蔵本）完了
- (2) 『コンテムツス・ムンヂ』（1596年、オックスフォード大学ボードレイ文庫蔵本）用例整理中
- (3) 『天草版平家物語』（1592年、大英図書館蔵本）完了
- (4) 『スピリツアル修行』（1607年、長崎大浦天主堂蔵本）57ウまで
- (5) 『懺悔録』（1632年、上智大学図書館蔵本）完了

〈抄物〉

¹ 江口正弘・溝口博幸（2005）『天草版平家物語資料大成 CD-ROM』尚文出版、など。

² 他に、近世の近松世話物浄瑠璃からも用例を採集したが、わずかであるため本稿では言及しない。

(6) 『玉塵抄』(1563-1597年、国立国会図書館蔵本『玉塵』) 巻4まで

(7) 『毛詩抄』(1539年、京都大学附属図書館清家文庫蔵古活字本『毛詩』) 巻4まで

キリシタン資料は、本文(序文を含む)のみを調査対象とした。したがって巻末の「和らげ」や正誤表からは用例を採集していない。また上記(1)～(5)はいずれもローマ字本であるため、ローマ字綴りとそれを翻字したものの両方をデータに採った。

なお抄物では、経文本文の疑問文は採らず、訓読文にみえる疑問文のみを採集した。

3. 用例の整理

3.1 概要

用例は作品ごとに Excel データにして保存した。『天草版平家物語』の一部を掲げる。

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
番号	肯否/疑問詞/正反/列挙/混成/その他	疑問詞	助詞(ぞ/や/か)	助詞の前	疑問の形式	用例	巻	原本頁	行	問い 疑い 反語	会話 地 心中
1	疑問詞	なんぞ	や	助動詞	なんぞーや	sono yuyeuo tazzunureba, cagacu xite xōtat suruua tōuneno fō nari : nanzo motouo tputomezu xite suyueo toranya ? (そのゆゑをたづぬれば、下字して上達するは常の法なり:なんぞ本をつとめずして末をとらんや?)	1	序A2ウ	1-3	反語	地
2	疑問詞	いかん	—	—	いかん	cono cunino fūzocu toxite, ichininni amatano na quany no tonaye aru coto uomo saqubexito nari : yuye icantonareba, core monono riuo midasuni yotte, tacocuno cotobauo manabanto suru xoxinno fitono tameniuu vōqinaru samatague nari. (この国の風俗として、一人にあまたの名、官位の称へあることをも避くべしとなり:ゆゑ如何となれば、これもの理をみだすによって、他国のことばを学ばんとする初心の人のためには大きな妨げなり。)	1	序A2ウ	6-10	問い	地
3	疑問詞	何者	ぞ	名詞	何者ぞ	soco ni foy no monoga yru ua nani monozo ? Rōjeqina yatōu giā : deyo, deyo, to, ([※番衆→家貞]「そこに布衣のものがある(は)なにものぞ? 狼藉なやつちや: 出よ, 出よ」と、)	1	5	14-15	問い	会話
4	疑問詞	いかが	ぞ	た	いかがーぞ	Cano rōdō no lyesada machi vqete, sate icaga gozatta zoto mōxitareba, Tadamori [...] bet no coto mo nai zoto cotayerarete gozatta (かの郎等の家貞待ちみせて、「さていかがござったぞ」と申したれば、忠盛[...]「別のこともいそ」と答へられてござった)	1	6	14-19	問い	会話
5	その他	—	—	—	一の?	VM Sate sate sore ua itazurana coto uo cugue tachi ua xerareta no ? (右馬、さてさてそれはいたづらなことを公家たちはせられたの?)	1	6	20-21	問い	会話
6	疑問詞	いかなる	—	—	いかなるーけん	gojen ni voite mauaretareba, sore mo mata cugue tachi fōxi uo cayete, ana curoguro curoqi tō cana. icanaru fito no vruxi nurigen to yūte fayassarate atta. ([※色黒の黒帥か]御前において舞はれたれば、それもまた公家たち拍子をかへ	1	7	3-6	疑い	会話 歌謡

用例は、左から次のように配置した(「」は Excel 枠の最上段に記したもの)。

- (A) 「番号」: 用例の通し番号。
- (B) 「肯否/疑問詞/正反/列挙/混成/その他」: 疑問文の種類分類。肯否疑問文(Yes-No 疑問文)、疑問詞疑問文(wh 疑問文)、正反疑問文(肯定命題と否定命題の列挙)、列挙疑問文(肯定命題の列挙)、混成疑問文(肯定命題と変項を含む命題の列挙)、その他。
- (C) 「疑問詞」: 疑問詞疑問文で用いられている疑問詞。
- (D) 「助詞(ぞ/や/か)」: 係助詞、あるいは終助詞「ぞ」「や」「か」
- (E) 「助詞の前」: (D)の助詞の直前に現れる語。助動詞、名詞、動詞(各語彙を表示)で分類した。
- (F) 「疑問の形式」: 疑問文の表現形式を簡略に示したもの。
- (G) 「用例」: 実際の用例。ローマ字本キリシタン資料の場合は、「ローマ字(翻字)」の順に記した。

- (H) 「巻」：原本で用例が現れる箇所巻数の巻数。
- (I) 「原本頁」：原本で用例が現れる箇所のページ。キリシタン資料の原本ではページ番号の印刷ミスなどが見られるが、それらは正しい頁番号に直して記した。
- (J) 「行」：原本で用例が現れる箇所の行。
- (K) 「問い／疑い／反語」：当該疑問文が表す意味・言語行為。
- (L) 「会話／地／心中」：当該疑問文が現れる場面。会話、地の文、心中思惟に分類。
- (M) 「備考」：附記すべき注意事項。原本の誤字、翻刻における翻字ミス、難解な語の語釈など。

上記のうち、(B)、(C)、(D)、(F) などには分類フィルターを付けることにより、利用者が自由に用例を絞り込むことができる。(F) は疑問表現を簡略に示したものであるが、凡そ疑問詞や係助詞・終助詞、「？」の有無などを目安にして作成した(下記の例参照)。資料全体を通覧して表現形式の分布を把握したい時などに活用することができる。

『天草版平家物語』

番号	～	疑問の形式	用例	巻	原本頁
15		—か?	QI. Xite, corebacari to voboximesuca? (喜. して、こればかりとおぼしめすか?)	1	9
16		何と—ぞ	arutoqi mata Tadamori Bijen no cuni cara Miyaco ye noborarete gozatta ni, teivō Acaxi vomote ua nanto aru zoto, von tazzone nasaretareba, (ある時また忠盛備前の国から都へ上られてござったに、帝王「明石おもてはなんとあるぞ」と、おん尋ねなされたれば、)	1	10

(G)「用例」は、できる限り疑問文のみを収めるようにしたが、前後の文脈も把握することが重要と考えた場合には、疑問文前後の文章も若干含めて記述した。また、[※] を附して語彙を補った箇所もある。なお、疑問詞疑問文の場合、一文中に疑問詞が複数現れる場合がある。分割が困難と判断した場合には、一文をそのまま採集し、(C)「疑問詞」と(F)「疑問の形式」において複数の疑問詞が含まれていることを記した。

『サントスの御作業』

番号	～	疑問詞	～	疑問の形式	用例	巻
92		いづくより／何の		いづくより／何の—ぞ	Izzucu yori nan no tameni coconi qitararuruzoto iyeri. ([※大将→アポストロ]いづくより何のためにここに来たらるぞと言へり.)	1

抄物の場合も、上記と同様の方針で用例採取を行った。

『毛詩抄』

番号	～	疑問詞	～	疑問の形式	用例	巻
144		何とやうに		何とやうに—ぞ	帰寧と云は、父母の処へ帰て、何とやうにをりやあるぞと云を云。	2
145		どこへ		どこへ—ぞ	爰に愍然として流るゝ泉が有が、どこへ流れて行ぞなれば、洪水へ流るゝぞ。	2

分類上、最も重要な (B) 「疑問文の種類」と、(K) 「問い／疑い／反語」分類については、以下の凡例説明の中で述べる。

3.2 凡例と分類基準について

3.2.1 凡例

凡例は以下のとおり定めた (2014 年 2 月時点)。『天草版平家物語』の例を掲げる。

【凡例】

1. ローマ字原本は、大英図書館蔵の影印本 (江口正弘編『天草版平家物語』新典社、2010) に拠った。
2. ローマ字の翻字及び語釈は、江口正弘注釈『天草版平家物語全注釈』(新典社、2009) に拠った。
3. 疑問文は、「肯否疑問文」「疑問詞疑問文」「正反疑問文」「列挙疑問文」「混成疑問文」「その他」の 6 種類に分類した。
 - (1) 肯否疑問文：一例が提示される疑問文。いわゆる Yes-No 疑問文。
 - (2) 疑問詞疑問文：変項 (不定語・疑問詞) を含む命題を提示する疑問文。いわゆる wh 疑問文。
 - (3) 正反疑問文：「来るか来ないか」のように肯定命題と否定命題を列挙する疑問文。
 - (4) 列挙疑問文：「A が来るか B が来るか」のように肯定命題を列挙する疑問文。
 - (5) 混成疑問文：「A が来るかどうか」のように肯定命題と変項 (不定語・疑問詞) を含む命題を列挙する疑問文。
 - (6) その他：上記の疑問文に含まれないもの。
4. 人物名・背景などを説明する必要がある場合には、本文中に [※] を用いて補った。
5. 会話部分では、話し手と聞き手を [※話し手→聞き手] の形式で表示した。ただし、話し手や聞き手が前後の文で明示されている場合には省略した。
6. 上記 5 において、明確な聞き手が不明、あるいはいないと判断される場合には、発話者のみを記した。
7. ローマ字原本のサ行音のうち、「サ」「ス」「ソ」の特殊な表記については「sa」「su」「so」で代用した。
8. 鼻母音の符号 (例：ã) は「a~」のように分けて表示した。
9. その他、データの最上部に示した略称名は、次の通りである。

... (※以下、前掲 3.1 節(A) ~ (M)と同様のため、省略)

3.2.2 分類基準について

上記の凡例のうち、分類上、重要となる3.(Excelの枠分類での(B))の疑問文の分類に関しては、以下に引用する金水(2013:1)に従った。

命題は、正確に言えば「真である可能性のある命題の集合」である。命題は、例えばつぎのような方式で提示される(現代語を例にとる。間接疑問文で示す)。

[※稿者補——以下、例示順に番号を附した]

1. 一例提示(補集合は暗示される): 田中さんが来るか、知らない→肯否疑問文
2. 肯定命題と否定命題の列挙: 田中さんが来るか来ないか、知らない→正反疑問文
3. 肯定命題の列挙: 田中さんが来るか山田さんが来るか、知らない→列挙疑問文
4. 変項(不定語・疑問詞)を含む命題の提示: 誰が来るか、知らない→疑問詞疑問文
5. 肯定命題と変項を含む命題の列挙: 田中さんが来るかどうか、知らない→混成疑問文

(金水 2013 : 1)

上記1~5に加え、現時点(2014年2月)では暫定的に「その他」の分類も立てている。これには次の(1)(2)のような念押しの問いかけ表現(「-の?」「-な?」等)を入れた。これらは厳密には疑問文とは呼べないが、類縁的表現として採集した。

(1) 右馬. さてさて忠盛といふ人はおぞい人であったの? (『天草平家』巻一、9)

(2) 次郎兵衛あざ笑うて、[※→伊勢の三郎]「それは金商人が所従ぢやな?」

(『天草平家』巻四、332)

また中世の文語資料では、「一や否や」という表現が多用される。この表現は現代語では“一かどうか”とも訳され、変項(不定語・疑問詞)を含むため、分類するとすれば4の混成疑問文に相当する。しかしJ.ロドリゲス『日本大文典』(1604-08年刊)ではこの表現について「○為るかしないか、行くか行かないか等といふ意を表す。」(巻二、135v³)と記しており、肯定命題と否定命題の列挙の疑問文(上記分類の2)として捉えられるので、本調査では正反疑問文に分類した。

その他、分類として問題となる9.(K)「問い/疑い/反語」の基準については、宮地(1971)、柳田(1985)、山口(1990)等の先行研究を参照して、以下の基準に則って分

³ 関連する記述を『日本大文典』から引用する。

○為るかしないか、行くか行かないか等といふ意を表す。章の題目とか、例へば主人が召使の罪に対して罰するのが適法であるかないかといふやうに、疑問を以て尋ねる時とかに用ゐる。

(巻二、135v、「YA, INAYA (や、否や), CAINAYA (か否や)」)

○又、Inaya? (否や)とも読まれる。例へば、Caqubequiya, inaya? (書くべきや、否や)。若しかしたら書くだらうか、或いは書かないだらうかといふ意。

(巻二、156、「よみ」に於ける否定助辞○附則)

類した。

- 〈問い〉 聞き手が存在し、その聞き手から明確な肯否の回答・理由説明を要求するもの。
〈疑い〉 聞き手がない、あるいは存在していても、その人物から明確な肯否の回答・理由説明が得られないと判断できるもの（自問・心情吐露の独言など）。
〈反語〉 疑問文の形式をとっていながら、すでに否定の判定を内に籠めており、聞き手から疑問文に対する具体的な回答を求めていると判断できるもの。

例えばキリシタン資料では、次のような例をそれぞれ〈問い〉〈疑い〉〈反語〉と判断した。

- (3) [※番衆→家貞]「そこに布衣のものがゐるはなにものぞ? 狼藉なやつぢや：
出よ，出よ」と 〔問い〕（『天草平家』巻一、5）
(4) 成親卿わが身のかうなるにつけても、子息の少将とをさない人々何たる目にかあ
はると思ひやらるるにも、心は身にそはなんだと、聞こえてござる
〔疑い〕（『天草平家』巻一、29）
(5) 苔の下にはたが返事をもせうぞ? ただ嵐に騒ぐ松の響ばかりでござった。
〔反語〕（『天草平家』巻一、79）

ただし、〈疑い〉と〈反語〉には判定が困難なものも少なくない。例えば〈疑い〉には、「[※聞き手が]存在していても、その人物から明確な回答・理由説明が得られないと判断できるもの」という基準を立てたが、これは、次の(6)のような独言や自問の疑問文を〈問い〉とは見なしがたく、〈疑い〉に含めるために設定したものである。

- (6) [※法皇は] 驚かせられ、「これはなににごとぞ」とばかり仰せられて、分明に御返事もなかった。
〔疑い〕（『天草平家』巻一、23）

しかし聞き手が存在するか否か、あるいは聞き手がその疑問文に対し回答できるか否かという点については、文脈から判断しがたいものが多く、結果として調査者の主観的判断に頼った部分が少なくない。データ利用者によっては〈問い〉と判断する例もあると思われるため、今後〈疑い〉と〈問い〉の分類基準については更に検討すべきと思われる。

一方〈反語〉の判定は、〈疑い〉よりは易しいが、「すでに否定の判定を内に籠めており、聞き手から疑問文に対する具体的な回答を求めている」という基準も、主観に基づく部分が多く、データ分析者によって判定がゆれる可能性がある。〈反語〉と〈問い〉の間にも厳密な判定基準を設けることが今後必要となる。

4. データの傾向

以上の基準で採集したキリシタン資料と抄物の疑問文について、全体的な用例の傾向を簡単にまとめる。まずキリシタン資料（整理中の『コンテムツス・ムンヂ』『スピリツアル修行』を除く）ではおおよそ【表1】のような分布が確認できる。

【表1】

資料 疑問文	サントス (文語)	天草平家 (口語)	懺悔録 (口語)
肯否	148	279	7
正反	15	3	3
列举	10	8	8
疑問詞	379	412	10
混成	0	0	0
その他	1	15	3
合計	553	717	31

いずれの資料でも、疑問詞疑問文が最も多く、肯否疑問文がそれに次ぐ。これらの具体的な表現形式については、『天草版伊曾保物語』（以下『伊曾保』）を調査した柳田（1985）の調査結果とはほぼ一致しており、例えば疑問詞疑問文⁴では「疑問詞ーヅ」が最も多い。ただし若干異なる例もあり、『伊曾保』では一例しか見られなかった「疑問詞カー」の例が『天草平家』では会話文などにも幾分現れている。

- (7) a. 明くる春の頃清盛祇王が所へ使をたてて、「いかに祇王、そののちは何事かある？」
 (『天草平家』 卷二、98)
- b. [※家族が] 待ちまらするところへ、切られたと聞こえたらば、いかほどか嘆きまらせうずらう？
 (『天草平家』 卷三、189-190)

また肯否疑問文⁵でも、『伊曾保』では「一カ」の形式で統一されているが（柳田 1985 : 123-125）、『天草平家』では「一カー」「一ヤー」など複数の表現形式が見られる。

- (8) a. [※木曾殿] 「あはれ、これは実盛でかあるらう」
 (『天草平家』 卷三、171)
- b. [※鎧が重いと言った木曾殿に] 兼平申したは、「別の様やござる？ 君の無勢にならせられたによって、臆させられたゆゑでござる：
 (『天草平家』 卷四、246)

その他、正反疑問文や列举疑問文も若干例見られるが、注目されるのは、混成疑問文が

⁴ 柳田（1985）での「要説明の疑問表現」に相当。

⁵ 柳田（1985）での「要判定の疑問表現」に相当。

一例も存在しない点である。「一カ何カ」「一ヤ何ヤ」のような表現は口語・文語資料ともに見当たらない。こうした混成疑問文が中世以降にどのように発生してきたのかも今後の研究課題といえよう。

一方、抄物の疑問文の分布は【表 2】の通りである。

【表 2】

資料 疑問文	玉塵抄 (巻四まで)	毛詩抄 (巻四まで)
肯否	354	50
正反	2	0
列举	18	4
疑問詞	130	218
混成	0	0
その他	0	0
合計	504	272

調査途中ではあるが、特徴的なのは、『玉塵抄』で、肯否疑問文の用例数が疑問詞疑問文の用例数を大きく上回るという点である。『玉塵抄』では「一カ」又は「一カソ」という形で〈疑い〉を示す例が多く見られ、この点がキリシタン資料と大きく異なる。

(9) a. 揚ノ字モ. 不審ナソ. 眼ノ字デアルカ. (『玉塵抄』巻四、400-401)

b. ナニトモ返事ヲセヌソ. キニアワヌコトヲ. 問タホドニカソ.

(『玉塵抄』巻一、31)

また疑問詞疑問文においても、従属節内に疑問文を補文として埋め込んだ「ナゼニーゾナレバ」という、キリシタン資料には見られない表現形式が数多く見られる。

(10) a. なぜに此篇を終にをくぞなれば、関雎のうてばひゞくやうに作たぞ。

(『毛詩抄』巻一、68)

b. 泉とはなぜに云ぞなれば、泉の水の流行して ^{アマネ} 普い様なほどに泉と云ぞ。

(『毛詩抄』巻三、280)

このように、〈疑い〉を表す肯否疑問文や「ナゼニーゾナレバ」という形で従属節に埋め込まれた疑問詞疑問文が多く見られる理由は、抄物が注釈書であるという資料的性格に起因すると思われる。抄物では字句の注釈や詩文・経文の背景説明が中心となるため、聞き手に直接問いかけるような疑問文よりも、上記(9a)のように「一カ」と字句解釈に〈疑い〉を提示したり、(10a-b)のように「ナゼニーゾナレバ」という形で事情説明する例が多くなる。したがってキリシタン資料とは用例数の分布などが大きく異なるのであり、分析の際にはこうした資料性の差異に留意してデータを取り扱うことが重要になると思われ

る。

5. まとめ——今後の課題について——

本稿では、中世日本語資料（キリシタン資料と抄物）に基づく疑問文データベース作成の進捗状況について報告した。現時点では『天草平家』『サントス』『懺悔録』の他、『玉塵抄』『毛詩抄』などが一部利用可能である。

今後の課題としては、調査資料を増やすとともに、凡例と用例の分類基準（特に、疑問文の種類と、〈問い〉〈疑い〉〈反語〉の判定基準）を厳密に定めていくことが重要と思われる。また、より汎用性の高いデータにするため、随時、利用者から要望を聞き、それらの要求に合わせたデータに修正していくことが必要になると考えられる。

【参考文献】

- 金水敏（2013）「日本語疑問文研究の課題」日本語疑問文の通時的・対照的言語学的研究第2回研究発表会ハンドアウト（2013年12月7-8日、於大阪大学）
- 宮地裕（1971）「疑問表現をめぐって」『国語国文』20-7, pp.1-16
- 柳田征司（1985）『室町時代の国語』東京堂出版
- 山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』明治書院

【調査資料】

- 『天草版平家物語』：江口正弘編（2010）『天草版平家物語 影印編』新典社、江口正弘注釈（2009）『天草版平家物語全注釈』新典社
- 『サントスの御作業』：H. チーリスク・福島邦道・三橋健解説（1976）『サントスの御作業』勉誠社、福島邦道（1979）『サントスの御作業 翻字研究篇』勉誠社
- 『懺悔録』：大塚光信翻字（1957）『コリヤード懺悔録』風間書房
- 『スピリツアル修行』：林田明（1975）『スピリツアル修行の研究 影印・翻字篇』風間書房
- 『コンテムツス・ムンヂ』：松岡洗司・三橋健解題（1979）『コンテムツス・ムンヂ』勉誠社、尾原悟編（2002）『コンテムツス・ムンヂ』（キリシタン研究第39輯）教文館
- 『日本大文典』：ロドリゲス原著・土井忠生訳註（1955）『日本大文典』三省堂
- 『玉塵抄』：中田祝夫編（1970）『玉塵抄（一）』勉誠社
- 『毛詩抄』：清原宣賢講述、倉石武四郎・小川環樹校訂（1996）『毛詩抄 詩経（一）』岩波書店